浄泉寺報
第10号
2017年
秋彼岸

昨年の報恩講の準備「おみがき」の様子

生と死を考える（後編）

浄泉寺住職　望月廣三

「書くことは生きることだ」と言われた師・安岡章太郎氏の言葉は、じつに多くの示唆に富んでいました。前回の第九号に書いたように、安岡先生のこの言葉に圧倒され畏縮さえ覚えたのは、何と言っても「生きる」という人生に対する指針が「書く」ことにあると明言されたことです。

「生きることは〇〇だ」と、これこそが生きることだと明言できるなんて、その頃の私には到底考えられないことだったのです。夢はありました。しかしそれが生きる目的だと確信をもって言うことはできなかったのです。つまりそれは、“生きる”ことに対する執念が脆弱だったからだと言わざるを得ないでしょう。

釈迦は生と死は一体だと教えています。「一体」とは、一つになって分けられない関係を言いますね。そこで私はこう捉えます。「死」は「生」の充足において完結するものである、と。生は死より勝れているというのではなく、生において死という存在の大小が決められるということです。むろんこの「大小」は、社会的名誉や地位を問題にしていません。

山本周五郎氏の小説『泥棒と若殿』をテレビで観ました。泥棒と若い大名との人間関係が軽妙にユーモラスに、じつに豊かに描かれています。そのなかで泥棒が若殿に説教（この逆転もすこぶる面白い）するのですが、彼が言います。「人間、何をやってもいいが、一生懸命やるものだ」と。この「一生懸命やるものだ」というありふれた科白に私は納得させられ、深い感銘を受けたのです。「生」の意味がここに“在る”ことに気づかされたのです。人間は何をするか、ではなく、それにどう向き合うか、なのだと。死の問題は生きることのなかに包含されていると思います。そのことを私は改めて思い知ったのです。

- 若坊守のひとりごと -

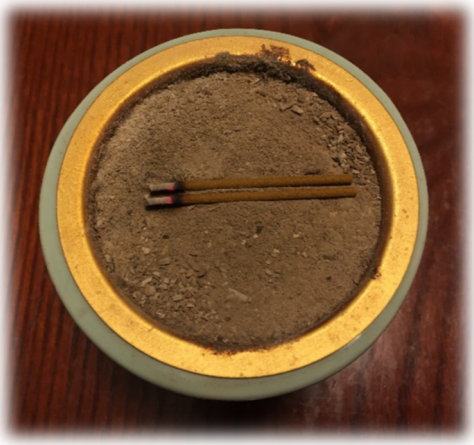
ある日、娘が突然「死んだ人はどこにいくの」と聞いてきました。少し前病院へお見舞いに行った人が亡くなってから、気になっていたようです。私は死んだことがないから分からないけど、娘はどう思うのかと尋ねると「かっか（お母さん）が死んだらわたしの心にいくんや」と言うので驚きました。娘なりに死を考えたのでしょう。そして嬉しかったのは、人の死は消滅ではなくおそらく自分の心で訪うものだと感じてくれたことです（親バカ！）。昨今ではお葬儀に子どもを出させたくないという考えもあるそうです。死は子どもから遠ざけるものでしょうか。死は疎むものでしょうか。

（浄泉寺若坊守・釋尼彌名）

お内仏（仏壇）に座る ⑧　～ 線香は立てたらええの？ 寝かせたらええの？ ～

お内仏（仏壇）にお参りする時には、線香をたき（熱香といいます）「正信偈」などのお勤めをします。その際、線香は立てておられるでしょうか？、あるいは横に寝かせておられるでしょうか？

真宗大谷派の作法としては、左の写真のように線香は横に寝かせます。他宗では、線香は立てることが一般的のようですが、浄土真宗では、線香を立てる必要はありません。写真のような香炉（土香炉といいます）に、線香を香炉に入る長さに適当に折ってから火をつけて、ご本尊に向かって左側に火のついた方を向けて、必ず横に寝かせて置きます。【上から見ると右下の写真のようになります】



この時、線香は何本に折ったらよいのかという質問もいただくことがありますが、本数に定めがある訳ではなく、香炉に入る長さに線香を折った時に、それが何本になっていても構いません。

もともと熱香は、抹香（粉末のお香）に附茸（今でいうマッチの役割をしたもの）で火をつけていました。それが、今では線香がそれらに代わるものとなったので、線香は立てずに寝かせて置くのです。

線香をたくことで、その場を荘厳し、私が仏様に真向かいになるための空間を整えます。

（浄泉寺若院・釋亜世）

【報恩講のお知らせ】

十二月十六日(土)　午後三時～

●大逮夜法要

●御伝鈔拝読・・・薄明かりの本堂で、親鸞聖人のご生涯を読み上げます。今年は下巻を拝読します。

【法話】望月廣三住職

報恩講のお勤め

御伝鈔の拝読

十二月十七日(日)　午前十一時～

●結願晨朝

●お斎・・・手作りのお膳を召上っていただきます。

●満日中法要

【法話】熊谷宗恵師（真宗大谷派元宗務総長）

熊谷先生による法話

手作りのお膳をいただく

※真宗門徒にとって最も大切な法要です。

ぜひ、お誘い合わせお参りください。

＜発行元・問い合わせ＞

真宗大谷派　楠林山　浄　泉　寺

〒656-0026 洲本市栄町４－３－４３　電話 0799-22-4798